

大学院は変わるか①

金沢大学は北陸の3国立と連携して新たな価値を生む博士の育成に取り組んでいる。大学院の教育と学生への支援をどう変えてきたか。和田隆志学長に報告してもらった。



和田 隆志

金沢大学長

2022年4月に学長に就任した私は5月に金沢大学未来ビジョン「志」を策定した。本学には「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を基本理念とする大学憲章がある。「志」ではこの基本理念に立脚しつつ未来に向けて研究、教育、経営のあるべき姿を掲げた。

キーワードは「未知知」である。それは現在、そして未来の課題を探索し克服するための知恵であり、新たな価値の創造につながる。それによる社会変革や非連続なイノベーションの創出、人材育成による社会貢献こそが私たちの「志」である。

具体的には、研究ではナノ生命科学研究所をはじめとする独自の世界的研究拠点を拡充する。教育では国際社会の中核的リーダーたる「金沢大学ブランド人材」を輩出する。この2本柱をつなぐのが大学院の飛躍的な機能強化であり、最重要ミッションに位置付けている。

従来、大学院はアカデミアのための特定学問分野の研究育成に重きを置いていた。加えて、私たちが目指す大学院の姿はその先にある。「新価値創造人材」と呼ぶ未来の新たな価値を創造し、社会の持続的な発展をけん引する博士人材を送り出し、社会に貢献することがその役割だ。そのために本学は大学院教

金沢大、価値生む博士育成

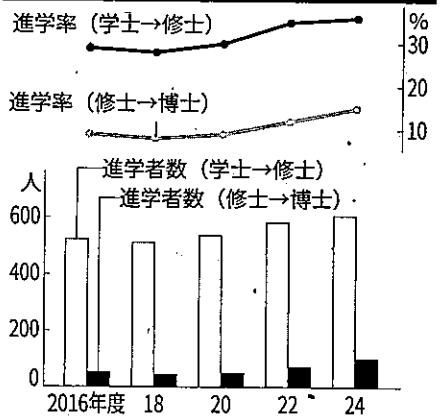
育改革を積み重ねてきた。一例を挙げると、22年度には博士前期課程と修士課程に「ラボローテーション」を導入し、23年度から必修化した。参加した院生は自分の専攻と異なる専攻の研究室と、専攻内の別の研究室の2カ所で研究を行う。複合的な視点や高い視座から全体を俯瞰(ふかん)する能力を養いつつ、研究環境の流動性向上を図る。

人工知能(AI)の時代には大学院においても総合力や人間力を育む必要がある。専門性に加えELSI(倫理的・法的・社会的課題)、哲学など人文・社会科学の知や総合知の重要性はますます高まっている。

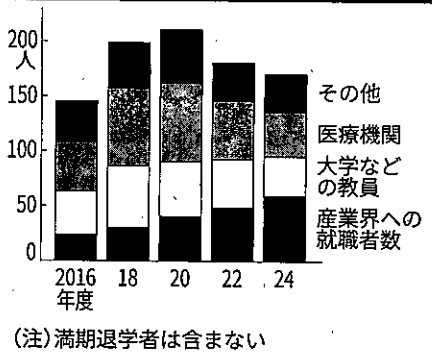
本学の特長の一つは、学士課程だけでなく大学院にも分野横断的なトランスアラブリスキル(汎用的能力)科目を設け、必修化していることだ。例えば博士課程の「次世代エッセンス実践」では、学生は自身の研究内容を専門が異なる学生にプレゼンすることを求められる。企業に入社した後、大学時代と異なるテーマの研究に携

総合知養い進路広げる／北陸地域で連携

金沢大の大学院進学率は上昇



博士課程修了者の進路



わること普通にある。そうした状況に対応するには異なる野の人と協働することはもちろん、それまでと異なる分野でも能力を発揮できる博士人材を育てなければならぬ。

汎用的能力を中心とした全研究分野横断の科目を導入し、リベラルアーツ教育を全学的に推進しているのはそのためだ。

Hakase+(ハカセプラス)という愛称の戦略も紹介したい。これは大学として責任を持って博士学生への支援を行うとともに博士課程進学を後押しする取り組みだ。主眼は経済支援とキャリア形成支援を一体で加速することにある。経済支援は選抜した優秀な博士学生に国の次世代研究者挑戦的研究プログラム(SPRING)などの財源を活用した研究費や奨励金を支給しているほか、博士進学を確約する学生を予約採用者として選抜し、大学の独自財源により授業料を免除するなどの支援を行っている。

多様なキャリアの実現には社会とのつながり、幅広い進路の開拓も重要だ。その一環として博士課程修了者を特任助教として採用する制度を23年度から始めた。博士課程修了後の3年間、特任助教として雇用し学外、特に海外留学や産業界などと

の研究交流を通じて研究を発展させる。これまでに女性10人を含む15人を採用した。今後も優秀な院生が安心して博士課程に進める環境づくりを徹底していきたい。

これらの改革が実り、大学院への進学者は増え、進学率も上がってきた。今後に向けては従来とは一味異なる「開かれた」大学院での教育・研究のありようの一層の質の向上が問われると考えている。

25年度から「未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業」(FLAGス・フラッグス)が展開されている。徹底した産学連携や国際化により質の高い博士人材の増加を図る事業である。本学もこの事業に採択された。私たちの計画は北陸先端科学技術大学院大学との連携を核にしている。同大学とは

18年度から融合科学共同専攻という大学院の共同教育課程を運営してきた。そこで学生は両大学の教員から指導や助言を受けることができる。

今後は富山大、福井大を加えた4校による北陸地区国立大学連合(H4U)の連携の下、大学院におけるリベラルアーツ教育や国内外の様々な機関との共創を進めていく。付言すると、北陸地域は生産年齢人口における国立大学の博士課程入学定員の割合が東京都に次いで高いエリアである。産業界に目を向ければ、日本や世界のニッチトップ企業も多い。

北陸地域には博士人材育成の先進的拠点となりうる潜在能力があると考えている。金沢大学が送り出す新価値創造

人材がグローバルに展開する企業はもろろん、地域のニッチトップ企業でも活躍し、世界に伍する存在に高め、日本全体に波及効果を及ぼす。そんな展開は夢ではない。

急速な少子化による学生数の減少、目を見張るAIの進歩に伴い、我が国の高等教育機関の教育・研究の現場はまさに大きな節目を迎えている。「知の総和」の向上を実現するうえで大学院の人材育成が果たす役割は大きい。今こそ、新たな価値を生み出す人材を社会とともに育てることが求められている。教育・研究の質の向上はもとより社会・産業界との共創、学

国内外の複数の大学・研究機関同士や産業界、自治体など、学びと実践を繰り返す好循環が大きなポイントであると感ずる。私の想(おも)いは「人こそ宝」である。本学は大学院教育を通じて新たな価値を創造する人材を育成・輩出し、社会への貢献を力強く進めていきたい。

失敗の教訓くみ

新時代の扉開け

過去の大学院を巡る改革は失敗が目立つ。理系の「ポスドククォーター」万人支援計画「画」や文系の法科大学院創設は期待されたインパクトを大学と社会にもたらせなかった。教訓を十分にくむ必要がある。今回はどう違つか。和田氏の寄稿からは大学院、特に博士課程教育が変わってきたことがうかがえる。問題はその効果が上がっているか。そして日本の研究

大学院が疲弊から脱し、博士課程進学者が持続的に増えるかどうかだ。理系の修士採用も昭和期に「おそろおそろ」始まったが、人材が良質だったことで広がり定着したと聞く。真に有能な博士が世に出れば、今度こそ新しい時代の扉が開くかもしれない。正念場だ。(編集委員 中丸亮夫)